

# 児童・保護者の学びを更新する「保護者参加型オンライン授業」

宝仙学園小学校 教諭 中村 優希

キーワード：小学校，低学年，学習者中心の学び，保護者参加

## 実践の概要（図1）

オンラインでの視聴に加え、保護者も当事者として、子どもたちにフィードバックを行う、参加型の授業実践である。多様な意見に触れながら、学びを創り上げる楽しさを子どもたちは感じ、保護者の教育に対する価値観を更新することにつながった。

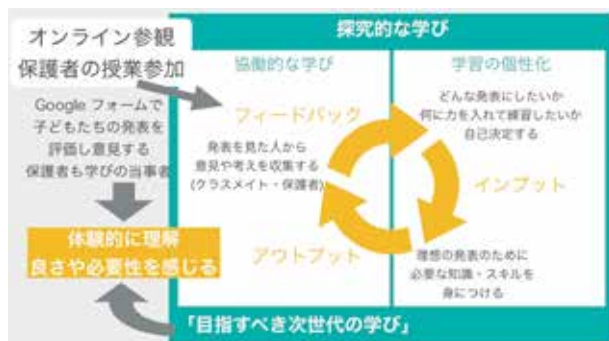


図1 本実践で実現したい学び

## 1. 目的・目標

### (1) 保護者参加型オンライン授業参観の意義

GIGA スクール構想×新学習指導要領によって、目指すべき次世代の学びが明らかになり、子どもたちに求められる資質・能力も変化してきている。我々大人が経験をしてきた学びとは異なるために、学校だけでなく、保護者の教育に対する価値観のアップデートの必要性が、これまで以上に高まっている。

そんな中、コロナ禍でも子どもたちの様子を家庭に届けようと、多くの学校でオンライン授業参観の取り組みがなされてきた。本校も「Zoom」を活用し、毎学期オンライン授業参観を実施することで、保護者への情報発信を続けてきていた。その一方で、映像を配信しているだけで「保護者に学びの意図は伝わるか」「本当に子どもが

学ぶ姿を見ているか」と疑問を持ち続けていた。

2021年4月26日、日本教育新聞 NIKKYO WEB 上で「GIGA スクール構想への保護者の理解『理解していない（聞いたこともない）59.2%』『あまり理解していない21.6%』」と報道され、約8割の保護者がGIGAスクール構想への理解が不十分だと明らかになった。令和の時代に求められる学びの姿が保護者に届いていないということであり、私が抱いていた疑問が実践後に奇しくも証明される形となった。

本実践は、保護者にZoom上で「音読劇『お手紙』の発表」を見てもらい、Googleフォームで子どもたちへのフィードバックをしていただく、保護者参加型のオンライン授業参観の提案である。保護者が学びの内側に入り、当事者として授業にかかわることで、これから必要な資質・能力を体験的に理解してもらえると考えている。

### (2) ICT活用の目的とねらい

ICT活用の目的は「多くの人からの意見・考えを収集する」ことである。Googleフォームを使用することで、即時に多様なフィードバックを得ることが可能となる。特に保護者からの大人の視点での評価は、子どもたちにとって新鮮である。データは自動集計されるため、低学年でも情報の分析を行うことができる。その結果浮かび上がってきた課題の中から、解決の過程・内容を自分で選択し取り組んでいく。

そのねらいは、「探究的な学びを実現していくこと」である。自分がしたいと思うこと・方向を見つけ、自分なりの解決に取り組むことを認め伸ばしていくことが、子どもたちの学びの意欲を高めるためには大切であると考えている。また、クラスメイトと考えを伝え合うことや保護者から意見をもらうことで、考えが深まったり、更

|  |  |  |
|--|--|--|
| <p>【本時の学習内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●指導目標／保護者への発表を通して、子どもたちの発表の工夫をより深める。</li> <li>●評価／これまでの学習で考えた工夫を活かし、発表につなげている。フィードバックを、次の発表に活かそうしている。</li> </ul> <p>【指導略案】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●単元指導計画（全体時間12時間）</li> <li>(1) 教科書『お手紙』を読み、場面の様子をとらえる。（6時間）</li> <li>(2) グループで分担を決めて発表の練習をする。（3時間）</li> <li>(3) 「みんなが審査員」各グループの発表を見て、Googleフォームでお互いにチェックする。（1時間）</li> <li>(4) 「中間発表会」保護者参加のオンライン授業参観（1時間）</li> <li>(5) 「最終発表会」発表の様子を動画として記録し、Googleドライブを通じて児童・保護者と共有する。（1時間）</li> <li>●本時の目標と展開 令和2年11月 児童数37名</li> <li>『お手紙』の学習から工夫して音読劇の発表を行い、保護者のフィードバックを基に、さらなる発表の工夫を考える。</li> </ul> | <p>学習活動</p> <p>音読劇『お手紙』<br/>オンライン<br/>中間発表</p> | <p>児童の活動</p> <p>チームで話し合った工夫を活かし発表する。</p> <p>保護者の活動</p> <p>オンライン視聴を行いつつ、児童の発表に対して、Googleフォームでフィードバックする。</p> |
|  | <p>学習活動</p> <p>発表の振り返り</p>                     | <p>児童の活動</p> <p>保護者からのフィードバックを基に、もっと良くしたい所・次は気をつけたい所などについて話し合う。</p>  |

新されたりしていくこともある。多様な交流の中で、自己と他者の考えをどちらも尊重しつつ、自己決定する機会をたくさん与えたい。

## 2. 実践内容



写真1 オンライン授業参観 音読劇 (Zoom画面)

### 2.1 保護者の授業参加

授業参観は、子どもたちの音読劇(写真1)の「中間発表会」という位置づけにした。保護者に見てもらうことがゴールではなく、あくまでも子どもたちの成長プロセスにある、1つの学びの場にしたと考えたためである(写真2)。



写真2 保護者へのお便り

オンライン授業内で保護者に授業参加を促すことは、これまでにない取り組みだと考えている。子どもたちが生きるこれからの時代では、オンライン上でのやりとりを学びにつなげることが必要不可欠である。

オンライン上でのフィードバックによって、学びが深まることを、子どもたちの姿から感じ取ってもらえたと感じている。

### 2.2 発表に磨きをかける子どもたち

大人の視点からの正当なフィードバックをもらい、自分たちなりの答えを追求・改善する経験を積み上げていった。自分の考えや発表の仕方を更新していく楽しさを、低学年のうちから感じられたであろう(写真3)。



写真3 評価データを基に話し合う子どもたち

## 2.3 Google サービスの活用

Google のクラウドプラットフォームを活用し、保護者や児童同士のやりとりを容易にした点で普及性も高いと考えている。Google フォームにより、使用端末や環境を問わず保護者から児童へのフィードバックが可能となる。児童は共有 Google ドライブにメンバーとして管理されており、回答が記録されたスプレッドシートへの同時アクセスが可能である。ネットワークを通じてクラウドサービスを活用する、保護者・児童のモデルとして、GIGA スクール構想の可能性を切り開くものになるのではないだろうか。

## 3. 成果

実践後に、担任するクラスの児童 37 名に対して、自己評価アンケートを実施した(表1)。

表1 授業後のアンケート(児童)

|   | とてもできた | できた | あまりできなかった | できなかった |
|---|--------|-----|-----------|--------|
| お友達の発表を見て「ここがいいなあ」が見つかりましたか?                  | 34     | 3   | 0         | 0      |
| お友達の発表を見て「こうしたほうがいいよ!」が見つかりましたか?              | 31     | 6   | 0         | 0      |
| お友達やお家の人からのチェックを見て「どこをよくしたらいいだろう?」と自分で考えましたか? | 33     | 2   | 2         | 0      |

クラスメイトの発表を見て、良さに気づいたりアドバイスをしたりすることを通して、何をどうするか自分で考えようとしていた児童が多いことが判る。自由記述の部分では、「お家の人と友だちが、ちがうところをおしえてくれて、よかった」と書く児童もあり、多様なフィードバックを肯定的に捉える姿も見られた。

保護者へのオンライン授業参観アンケートでは、

- ・お友達の発表を真剣に聞き、良いところを見つけ合うことが、クラス全体の学びに繋がると感じました。
- ・のびのびと発表…(中略)…違う目線で参観することが出来たことにうれしく感謝致します。
- ・他の子の良いところを発言する姿から、普段も尊重し合いながら生活している様子が想像できました。

などの感想が得られた。

オンライン上であっても、授業に参加し子どもたちの変化・様子に触れることで、子どもたちが経験する学びの在り方、その学びの良さ・必要性を多くの保護者が理解したと感じている。

## 4. 今後に向けて

本実践では低学年ということで、身近な存在であるクラスメイト・保護者との関わりを中心にした。学年が上がるとともに地域や社会の人々など範囲を広げ、より多様な考えに触れる学びを実現していきたい。

また、子どもたちが学びを更新するためには、こうした活動をあらゆる場面で続けていくことが大事だと考えている。主語が学習者となる学びの実現に向けて、日々の生活場面や他教科の学習においても、子どもたちが自分の考えを伝え合ったり、進む道を自分で決定したりできるように設計をしていきたい。